



ソルボンヌ大学の前で(1981年クリスマス)

🌟 帰国後の研究

講義を休講にすること、補講の日にも、それとしておわびのことが書かれていた。これまで学んでいた日本の大学とは大違いだった。だが、何より違っていたのは、オリジナルの資料や楽譜がいくらかでも転がっていたことである。パリ国立図書館の音楽部門で当時の作曲家の自筆譜に初めて触れたときの心のときめきは今でも覚えている。こうして、二年目にフランスの十九世紀初期の作曲家メニールについて論文を書いてどうやら修士課程を修了し、帰国して日本の修士課程に復学した。

その後、研究の中身は少しずつ変化したが、この一〇年ほどは、パリ万博と音楽との関係について調べている。一九九八年には手はじめに「パリ万博音楽案内」(音楽之友社)を出版したが、その後も研究を続けている。それと関連して、「日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究——一九〇〇年パリ万博前後における東西の視線の相互変容」(日本学術振興会科学研究費採択課題)についても、共同研究の代表者になっている。

現在は愛知県立芸術大学で教えているが、つい最近も教え子がフランスの大学院に映画音楽の研究のために留学した。彼女から届いたメールには大学の事務局で登録をめぐってトラブルがあったこと、しかし、担当教授のとりなしで無事入学できたことが綿々となつづられていた。

それを読んで、「これでソルボンヌに入学できなかつたら、経団連の方たちになんと説明しておわびすればよいのか」と悩んだ昔の自分に一瞬戻った気がした。そのときは無我夢中で過ごしたが、本当に夢のような二年間だった。

この場を借りて改めて御礼申しあげたい。

中央公論 3月号 発売中! 定価800円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社
☎ 03-3563-1431

特集 国有化日本——出口のない経済危機管理

金融社会主義国家の足音 **水木 楊**
大逃走をもくろむメガバンク **箭内 昇**

(緊急提言) 日本は何を間違えているのか リチャード・クー/岩田規久男/塩崎恭久/池尾和人/末永 徹

[特集] 政党不信 —— 再生の道筋をさぐる | **[靖国を考える]** 山折哲雄

経営者は「政策なき政党」を見放しつつある **茂木友三郎** | 日本人の心を引き裂いた「知」のさかしら

ソルボンヌでの二年間

国際文化交流財団第五回生（一九八〇年度）。

一九七九年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。

八二年パリ・ソルボンヌ大学大学院音楽科修士課程修了。八三年東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程修了。八六年同博士課程満期退学、助手に採用される。八九年愛知県立芸術大学に赴任。九五年より現職。専門は近代フランス音楽史。



井上さつき
いのうえ さつき

愛知県立芸術大学音楽学部助教授

当たった鉄砲

「下手な鉄砲も数打ちや当たるとっていうからね。受けるだけ受けてみたら」というのがF先生のアドヴァイスだった。大学の掲示板に小さく貼り出されていた国際文化交流財団の奨学生募集を見て、院の一年生だった私はフランスに留学した経験のある先生に相談しに行ったのだ。今から四半世紀近くも昔のこと、留学はそれなりに大変だった。

どの学問分野にも流行らしきものがあると思うが、音楽学の分野では当時、バロック音楽研究と民族音楽研究がさかんだった。しかし、私自身の興味はフランスの十九世紀に向いていた。自分の中では、フランスということでもひとつハンディ、十九世紀ということでもひとつハンディを背負った

気分だった。研究者も少なく、資料はもちらん、参考文献すら日本にはほとんどなかった。

準備万端とはいいがたかったが、奨学生の試験を受けたところ、ありがたいことに採用していただけた。「下手な鉄砲」の一発目がビギナーズ・ラックで当たったようなものだ。こうして翌年夏には、パリのソルボンヌ大学の修士課程に留学するために日本を離れた。夏の間は語学研修のため、ディジョンで過ごした。楽しい語学教室、おいしいワイン、外国旅行など、新しい経験の連続で、この夏はすべてがバラ色に輝いていた。ところが、秋に入ってパリに戻り、いざ大学が始まると、現実が押し寄せてきた。夏の間は学制が変更され、予備登録しておいたはずができていなかったのだ。事務局で交渉したものの全く打ちあかな

●国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一五四名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

い。話を通じない、天気は悪い、だんだん寒くなって日も短くなってくる、宿舎は住み心地が悪い……さすがに落ち込み、大学に入れなかったらどうしようかと本気で悩んだ。ところが、指導教授のM先生と面会するやいなや、登録の問題は電話一本でいっぺんに片付いた。まさしく「ツルの一声」だった。

ソルボンヌの先生たち

フランス人は部屋の電気を暗くしてテレビを見るが、この先生の研究室も真っ暗に近い状態で、机の上には、白熱灯のスタンドとタバコをくわえさせたしゃれこうべがひとつ置かれていた。私はなるべくそちらを見ないようにしていたが、「メモント・モリ(死を思え)」ということだったのでろうか。ともあれこの部屋で、学問的な方法を鍛え直された。論文指導のほかに講義もいくつかついていたが、ある日、文献調査法の先生から自宅に手紙が送られてきた。読んでみると、そこには、やむをえず次の

(注)メモント・モリ(memento mori)：ラテン語で「死を思え」「死を忘れるな」の意で、死の前には現世的なものの一切が無力であること、あるいは人間の誤りやすさを示す警句。また、死の象徴(アイコン)としてのしゃれこうべのことも指す。